

ハインリッヒ・ツイレ『マインミリヨー』に於ける 風刺・ユーモア・Witz

佐藤裕子

0. はじめに

ハインリッヒ・ツイレ (Heinrich Zille) は、生涯を通して貧しい境遇にある人たちを描いた画家である。狭く薄暗い裏庭や路地、食堂と居間と寝室と洗面所を兼用する彼らのたった一つの部屋、そこに溢れる子どもたち、失業者が時間をつぶす居酒屋、警官に捕らえられる娼婦たち……。マックス・リーバーマン (Max Liebermann) はツイレの『ベルリンの話と絵』 (*Berliner Geschichten und Bilder* 1924) に手紙の形式をとった前書きで「確かに君が描いているものは、全くもって愉快なものではない。」¹と述べているが、リーバーマンによると、真に優れた芸術家は、芸術という手段を使って、作品を見る人が芸術家の精神的体験を共有するように伝達することができ、彼はツイレの芸術家としての資質を高く評価している。ツイレは、描く対象に対する自分自身の共感や理解や慈しみを自分の作品を見る人に伝えることができた。それゆえに「全くもって愉快なものではない」対象も、見るものに語りかけ、人を引きつけてやまないであろう。もう一つ、忘れてはならないのは、ツイレの作品が強く風刺性を帯びていることである。ツイレの「小さな人びと」の絵は、社会の底辺で懸命に生活と格闘する人びとのユーモアに富んだ姿のみを私たちに伝達しているわけではない。多くはリトグラフや絵の下に書かれた短い Witz と相まって、社会に対する鋭い風刺作品となっている。本稿では、ツイレの画集『マインミリヨー』の中に納められている作品を中心に、ツイレが「ミリヨー」(Milljöh) と呼ぶ、作品のモチーフとなった人々を取り巻く境遇と画家ツイレとの関係、そしてその作品

1 Max Liebermann: In: *Das große Zill-Album*. Köln: Komet, 2009, S.6.

が帯びた風刺性について考察するものである。

1. 『メインミリヨー』

ハインリッヒ・ツイレの『メインミリヨー』(*Mein Milljöh*)は1914年、Dr.Eysler & Co. G.m.b.H.によって出版された。1907年に石版工として30年にわたり働いてきた写真会社を解雇されたツイレは、その後、画家として独立を余儀なくされ、芸術家としての道を歩み始める。画業と両立させつつ、勤勉、忠実に写真会社に勤めてきたツイレにとってこの突然の解雇は衝撃的出来事であり、大きな心の痛みを伴ったものであった。解雇の理由は、経験を積んだ石版工としてのツイレが、雇用者側にとって経費がかかりすぎるようになったことと、ツイレ自身は実際の政治からは意識的に距離を取っていたが、社会の底辺の「置き去りにされた人々」(*Die Vergessenen*)を描く彼の作品に表れた左翼的な傾向であった²。幼少の頃から赤貧を洗う生活の不安を身にしみて体験してきたツイレにとって、50歳で安定した職を失った不安は大きかったが、さらに彼を傷つけ絶望させたのは、会社のためを思い技術の向上に創意工夫をこらし、ひたすら忠実に心身をすり減らして働いてきた自分が、雇用主によっていとも簡単にコストのかからない若い働き手にすげ替えられたことであった。この時期、失意のツイレのもとを訪れ、再起へと励ましたのは、マックス・リーバーマンやアウグスト・ガウル(August Gaul)、フリッツ・クリムシュ(Fritz Klimsch)などの友人たちであったが、実は失意のツイレとは逆に友人たちは、ツイレが日々の労働から解放されて芸術に打ち込めるようになったことを喜んだ³。

ツイレの心を深く傷つけたこの出来事は、皮肉なことにそれまで画家としてのツイレの仕事をまとめ、より充実させていくことになる。解雇の翌年、1908年には第1作目の画集『路傍の子供たち』(*Kinder der Straßen*)が出版され、それに続く2作目の画集が、『メインミリヨー』

2 Kremming, Rolf: *Heinrich Zille – Berliner Köpfe*. Berlin: Jaron Verlag, 2002, S83.

3 Fischer, Lothar: *Heinrich Zille in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*. Reinbeck bei Hamburg: Rowohlt, 1979, S.50.

(*Mein Milljöh*)であるが、この画集は1920年代末までに10万部が出版されている⁴。この時期はツイレにとって特に多忙かつ多産な時期であった。1913年にベルリン分離派(Berliner Secession)から独立して新しくできた新分離派(Neue Secession)の創立者に名を連ねた。同年に『娼婦の会話』(*Hurengespräch*)と『ベルリンの空気』(*Berliner Luft*)も出版されている。

ツイレは第2作目となる画集に『マインミリヨー』というタイトルを与えているが、ミリヨーとはもともとフランス語からドイツ語に取り入れられた言葉、ミリュー(Milieu)の綴りをわかりやすいドイツ風にし、言い換えたものである。„Milljöh“は1冊の画集にとどまらず、ツイレが生涯描き続けた作品を包括し、またモチーフとなった人々とその境遇、彼らを囲む世界に対するツイレ自身の姿勢を表現するキーワードである。ツイレはこの画集が出版されてから10年後、リーパーマンの推薦により、プロイセン芸術アカデミーに迎え入れられるが、そのときにしたためられた履歴書にこう記している。



『マインミリヨー』表紙

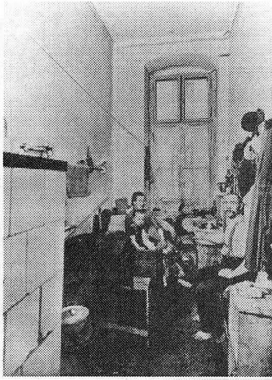
貧しい若い芸術家たちは豊かさや分厚いハムの載ったパンを描き、逆に裕福な人たちは貧しい人々を文章や絵画で描きます。私は、私の階層のもとから離れませんでした(Ich bin bei meinem Milljöh geblieben.) [……]⁵

2. ツイレの Milljöh

ツイレが生涯を通じて描き続けた「マインミリヨー」と呼ぶ人たちと、彼らを取り巻く世界は、とりもなおさずツイレが育った世界であった。

4 Fischer 59.

5 Zille, Heinrich: *Berliner Geschichten und Bilder*.Fourier:Wiesbaden, 2003.



ベルリンのアパート 1910年頃
<http://www.dhm.de/lemo/html/kaiserreich/alltagsleben/index.html>

彼らの日々の暮らしの中での生きるための闘いは、ツイレ自身が体験したものであった。ハインリッヒ・ツイレは1858年1月10日にザクセン地方のラーデベルク（Radeberg）に、母エルネスティーネ・ルイーゼ（Ernestine Louise）、旧姓ハイニッツ（Heinitz）と時計や錠前を扱う職人ヨハン・トラウゴット・ツイレ（Johann Traugott Zille）の間に生まれた。父親の収入は少なく一家の生活は苦しかった。その上、父が友人の債務の保証人となったことが発端でドレスデンの刑務所に4年間拘留されることとなる。父親不在の間、一家はザクセンスイスにある母方の祖父母の元に身を寄せるが、炭坑夫として働く祖父の生活もまた同様に貧しかった。祖父は器用な人で炭坑夫でありながら持ち込まれる様々な時計の修理をしていた。怪我のため炭坑で働けなくなった後は、もっぱら時計の修理をして生計を立てることになる。

ツイレ一家がベルリンに移り住んだのは、1867年のことである。釈放された父親が債権者の取り立てから逃れるために一時デンマークに行き、その後ベルリンに移って家族を呼び寄せたのである。ザクセンのスイスと呼ばれる山と溪谷に囲まれた自然豊かな地方から出てきたツイレにとって、この時が初めての大都市体験であった。ベルリンとの遭遇は不安に満ちたものであり、後のツイレの絵に描かれた周辺の世界への親近感とはまったく逆に、ツイレは初めてのベルリンでの生活に不快な違和感を抱いたようである。

[……] それまでの3年間は山や谷のある祖父母のところで自由にのびのびと暮らしてきました。今や、ここにあるのはそびえ立つ狭苦しい塀と騒がしい路地でした。私はおどおどと両親にしがみついたのです。

やっとの思いで私たちは目的地にたどり着きました。全てがわたしにとってあまりにも立派でありました。玄関の扉、木がしかれた階段、ろくろ細工の手摺り、階段の照明——しかし、窓が一つしかない私たちの部屋と廊下にある小さな台所は、ひどいものでした。私たちはこの台所を他の4人の間借り人と共同で使ったのです。私は部屋があまりにもみすばらしいのに愕然としました。壁紙は破れ、以前にベッドや棚が置いてあったところには跡形がついていて、それは殆ど壁紙の模様と見まがうようでした。つぶれた南京虫の血の跡があり、部屋の隅にはわらの束が置いてありました。それが私たちの寝床だったのです。帯金がついた木製の大きなトランクと束ねられた衣類が数束……それが、新しい人生を始めるために、わたしたちが持っていた全てでした⁶。

写真は1910年頃のベルリンの貧しい人々のアパートの内部の様子であるが、これより約40年前にベルリンに移り住んだ当初のツイレ一家のアパートはさらに過酷な状態であったことが推察される。一家のアパートは、ベルリン、Schlesischer Bahnhof (Ostbahnhof) の近く Kleine Andreasstraße 17番地にあった。

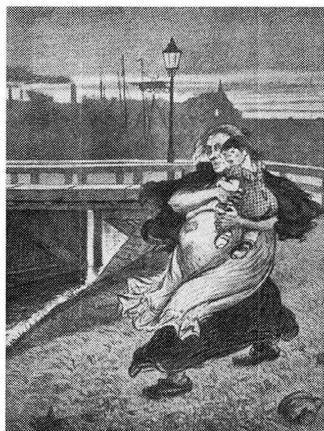
当時、貧しい人々は、夜勤明けで寝床を必要とする若者に昼間、自分の住まいのベッドを貸して僅かながら生活の足しにしていたが、床の上に敷いた藁の上で寝起きしているツイレ一家にはそれもままならなかった。まもなくツイレ少年はさまざまなアルバイトによって一家の家計を助けることとなる。祖父から手仕事の器用さを受け継いだ母親は、端布で犬や猫の飾りのついたインク拭いやアクセサリー、針刺しなどを作っていたが、それらを近くの文具屋に売りに行くのはツイレの仕事であった。家族とともにザクセンから出てきた少年は瞬間にベルリンの空気に馴染んでいく。10歳のツイレは旅行者を相手にベルリンの街のガイドとして働き始める。観光客を案内しながら、教会の脇にある死体置き場の話、子殺しのアンナの話、田舎から出てきて自殺した女中の話など、ベルリンで起こった凄惨な事件のことを話して聞かせた。ツイレは客を「名所」

6 Kremming, S.27.

に案内した後、居酒屋テュベッケ（Tübbecke）に連れて行った。テュベッケは、芸術院で学んだ主人が経営する簡素な居酒屋で、ツイレ少年の心を捉えたのは、そこにかかっている絵やリトグラフ、銅版画の数々であった。

そこにはコート掛けも、ガスも、ビリヤードも、冷えたビールもバイエルンのビールもありませんでしたが、素晴らしいものが全部ありました。私は、素晴らしい絵や珍しい版画、銅版画、スケッチに目を奪われたものです。というのも、テュベッケは漁師で居酒屋の主人であるばかりでなく、画家を志して芸術アカデミーに通ったことがあったのです。お客は Potsdamer Stange や Spree-Athener などのビールを、馬車の御者は Gilka を、そして私は木いちご入りの白ビールを小ジョッキで飲みました。テュベッケは私たちにシュトララウの紋章⁷や蟹を見せてくれ、シュトララウの魚行列や死体釣

りの話をしてくれました。というのも、シュトララウの教会と恋愛島は自殺の名所だったからです。教会わきの小さな死体安置所には絶えず釣られた死体が安置されていて引き取られるのを待っていました⁸。



「河の中へ」

ツイレ自身、少年時代の体験が後に自分の絵を構成するうえで役に立たと述べているように、Witz や逸話、様々な生業を持った人々の日々の営み、貧しさ……そこには画家ツイレの作品を特徴づける重要な要素がそろっている。特に「死」はツイレの作品に様々

7 シュトララウ（Stralau）はベルリンの地区の名称。当時は漁村であった。紋章には銀色の鯉が描かれている。

8 Fischer, S.14.

な形をとって表れるテーマとなった。

前述の『路傍の子どもたち』の中に収められている「河の中へ」(*Ins Wasser*)と題された絵は、母子がまさに河に飛び込もうとする瞬間が描かれている。自殺という行為にいたった絶望的な経緯は伝えられないが、自分たちが飛び込もうとする方向を凝視する母親の暗く思い詰めた表情は、それ以外の決断はこの母子にとってもはや残されていないことを語っている。母の両腕に抱かれた女の子は、母親の只ならぬ気配を感じて怯えているようにも見える。険しい表情で河を見つめながら母に尋ねる。

「かあちゃん、あそこ寒くないかな。」

「いいさ。魚だっていつもあそこで生きてるんだから。」⁹

母親は大腿で岸へと急いでいる。急がないと恐ろしいのだ。水に飛び込んでしまえばもう苦しみや恐怖とはおさらばだ。ツイレは、自殺というユーモアの入り込むすべもない極限状況に、この極めて乾いた辛辣なWitzを添えている。母親はそれまでも何かにつけ怯える子供をなだめてきた。死に向かうこの瞬間にも、腕の中の子供を大丈夫だと言ってなだめる。魚だってあそこで生きているのだから。本当は、死が待っている自分たちにとって、寒さも暑さも、関係ないことなのであるが。ここでは「生きている魚」の「生」と母子の「死」がズレながら対峙して滑稽さを醸し出しながら、同時にこの母子を無理心中という悲惨な事態に追いやった社会への辛辣な風刺となっている。入水自殺は『マインミリヨー』の中にも出てくる。「水死体」(*Wasserleiche*)と題されたこちらの光景はさらに絶望的である。川辺に横たわった女性の死体を警官が見ている。夜である。雲に覆われた夜空に出た冷たい満月の光がその光景を浮かび上がらせる¹⁰。この絵には何の言葉も添えられていない。

3. 裏庭の子どもたち — 「遊び」

画集『マインミリヨー』には121の作品が収められているが、表紙の

9 Fischer, S.52.

10 Zille, Heinrich: *Mein Milljöh*. Köln: KOMET, Fotostatischer Nachdruck der 1914 erschienenen Erstauflage. S.11

副題「ベルリンの生活から」が示しているように、ここには、貧しい人々の暮らすアパートの裏庭やその部屋の中、アレキサンダー広場、失業者と子供がたむろする居酒屋、水辺、裁判所と病院、公園……あらゆる場所が舞台となって、男、女、赤ん坊から老人まで全ての世代にわたる人々の生きる様子が描かれ、絵の下には画家による Witz がベルリン方言で添えられている。

裏庭はツイレの絵に出てくる子供たちの重要な遊び場である。子供や犬、赤ん坊、地面に置かれたささやかなおもちゃ、子らを見守る母親たち…。母親たちにとって裏庭は子育ての場でもある。押し黙ったようにそそり立つ古びた建物の間から、僅かに空が見える。見える空の狭さと同じだけ狭い下の空間では、毎日のように子供たちの賑やかな世界が展開される。「遊び」(Spiel) と題されたこの作品では、裏庭で賑やかに遊ぶ子どもたちの様子が描かれているが、一見、都市の Idylle のようなこの光景の中に、よく見ると風刺が潜んでいる。絵の真ん中に子どもが3人立っている。6歳ぐらいの女の子が、警官役の少年に向かって訴える。「おまわりさん、この男が私に声をかけたんですよ。」訴えられている男の子はさらに幼い。4歳くらいだろうか。女の子はスカートの後ろ側の裾をたくし上げている。どうやら娼婦のまねをしているようだ。客



「遊び」

を取ろうとするところを警官に見つけて言い訳をしているのである。周りの女の子たちも同じくスカートの後ろの裾をたくし上げて、後ろを振り返って流し目をおくっている。この子どもたちは、日々、自分たちが目にする街の娼婦たちの様子をまねているのである。

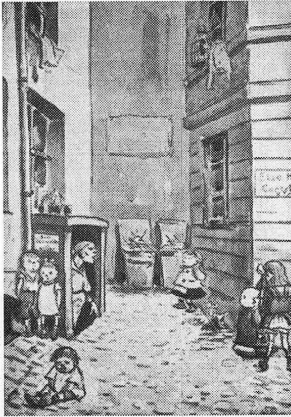
子どもの大いなる好奇心の対象はおとなの様子やしぐさであり、子どもは大人のまねをしながら遊び、育っていく。1900年頃のベルリンには約1万人の娼婦

がいたという¹¹。タイトルのドイツ語 „Spiel“ には「遊び」という意味と「演じる」という意味があるが、むろん、ここではその双方の意味が込められている。スカートの後ろの裾をたくし上げ、娼婦のまねをして歩く少女たちの姿はショッキングな光景であるが、同じ庭にいる大人たちは、いたって教育上好ましからざる遊びを当たり前の光景としてやり過ごしている。「あるべき姿」という規則によって縛られた道徳的な善悪とは無縁の生の姿がそこにある。画家もまた、道徳的判断をしていない。絵の右下には、木馬と人形が寂しくぼつんと置かれている。本来なら木馬や人形で遊ぶ年齢の子どもたちなのだ。子どもたちの無邪気さと遊びの思いもかけぬ内容の落差が、この絵のおもしろさであるが、周りの大人が春を売って生きて行かざるを得ない貧しい現実、そしてその現実子ども遊びに引き継がれ、貧しさもまた次の世代に引き継がれていくという、厳しく不条理な社会の現実の風刺となっている。画家は風刺しつつも、彼らの境遇を理解し、貧しい売春の現実を逆手にとって遊ぶ子どもたちの、大人の姿を観察する視線の賢さや、たくましさを肯定している。

4. 裏庭に咲いた花

次ページで紹介するのは『マインミリヨー』に出てくるもう一つの裏庭の絵である。塀と建物に囲まれた殺伐とした裏庭に、一カ所だけアパートの壁際にチューリップが咲いている。殺風景な空間に咲いた花はまるでそこだけが別世界のようにみずみずしくて美しく、子どもたちにとっては抗しがたいほどの魅力である。公園に咲いてるきれいな花が、うちの裏にも咲くなんて。花びらにさわってみたくてたまらない。できることならこっそり摘んで持って帰りたい。家のだれかにあげるのだろうか。まるでその心を読んだみたい、おばさんが向かいの入り口から顔を出して釘を刺す。「花のそばに寄るんじゃないよ。ゴミ箱で遊びな。」子どもたちは、何も悪さはしませんというように手を後ろ手に組んでいる。本当は花にさわりたいという心を見透かされまいと息をひそめている。

11 Kremming, S. 94.



「裏庭に咲いた花」

この絵の裏庭は『遊び』の舞台となった裏庭よりさらに貧しく、ここには地べたにころがったおもちゃもない。子どもたちは遊ぶものが何もないから、いつもは庭の奥の壁に並べられた2つのゴミ箱で遊んでいるのだ。裏庭の僅かな土の部分に植えられたチューリップは子どもたちの格好の獲物だ。他の植木鉢は、子どもたちの手の届かないよう建物の出入り口を覆う屋根の上に避難させてあるけれど、地面に植えたチューリップは危険極まりない。誰かの母親だろうか、お婆さんは気が気でない。大人だって美しい花を愛でる心が変わりはない。ゲーテの「野

ばら」のテーマがツイレの Milljöh で繰り広げられるとこのようになるだろう。

5. 聖週間（クリスマスと新年の間）¹²

ツイレは画家、版画家としての評価と並んでユーモリストとしても高く評価されているが、ツイレの友人でもあったアドルフ・ハイルボルン（Adolf Heilborn）やリーバーマンはツイレのユーモアをケラーやジャン・パウル、ジョナサン・スウィフト、ローレンス・スターンと並べて評価している。

[……] 彼はただ記録し、自分の印象のみを伝えているように見える。しかしこの表面上の静けさの背後に私たちは彼の心の温かな脈拍と貧しく惨めな人々と痛みを分かち合う姿勢を感じるのである。ツイレは世間では、滑稽な話や悲しい話を絵にして見せるユーモリストとされている。

12 聖週間はカトリックでは通常は復活祭に至までの1週間をさすが、ここではキリストの誕生から新年までを StilleWoche、聖なる週間としている。

確かにそうではあるが、彼は遙かにユーモリストを超えた存在である：彼にはゴットフリート・ケラーやあるいは、さらに時代をさかのぼって、ジャン・パウルやスウィフト、スターンのようなユーモアがある。白いカラスのように希有なこのユーモアはツイレの芸術家としての力量に負うものである¹³。



「聖週間」—クリスマスと新年の間

「ユーモア」はツイレの作品全体を貫くバックボーンであるが、絵画やリトグラフの下に添えられる Witz は時にして辛辣で明らかに攻撃性を持ったものもある。『聖週間—クリスマスと新年の間』と題された作品には以下のような Witz が添えられている。

「でも、奥さん、聖週間なのに洗濯をなさっていますが、そんなことすると災いが起きますよ。だれかが死にますよ。」

「別にいいですよ、委員さん。少々減ったって、うちには十分いますから。」

少々減ったって、十分いるからいいというのは子どもたちのことである。狭いアパートの部屋で母親が洗濯ものを大鍋で煮ている。部屋は17歳くらいの長女を先頭に赤ん坊まで男女9人の子どもたちで溢れていて足の踏み場もないほどである。家具と言えるのは長女が末の赤ん坊を抱いて座っている椅子ぐらいで、他の兄弟は床に座っているか、立っているかである。母親と顔立ちの似た長女は膝の上で赤ん坊をあやしながら、黙々と洗濯物を煮ている母親と外から来た「委員」の話に耳を傾けている。子どもの中で年長の子は母親たちの話を追っているが、他の子たちはお構いなしにそれぞれ好きなことをしている。この家族にとってはク

13 Heilborn, Adolf: Heinrich Zille. Berlin-Zehlendorf: Rembrandt, S. 27.

クリスマスも新年も、他の日と大差はない。母親は働かなくてはならず、子どもたちは居場所を探して遊んだり、喧嘩したり、親を手伝ったりして日々暮らしていく。ツイレは「委員さん」と呼ばれる街の風紀を取り締まる女の、規則を振りかざす高圧的な態度に、貧しい人々の生活を無視して進められる政治を重ねた。その女の言葉に対して、母親はうつむいて洗濯物を見たまま淡々とした表情で、もう子どもたちは十分いっぱいいるから別に減ってもいいと切り返す。母親の言葉の、“Wir hab’n genug.“(Wir haben es genug.)には、「十分ある」という意味と、「もううんざりだ」という意味があるが、むろんここではその2つの意味が重ねられているのだ。そしてタイトルのドイツ語 *Stille Woche* (静かな1週間)の「静かな」(still)という言葉に子どもたちで溢れかえる狭い部屋の喧噪を対立させている。

十分いるから子どもが減ってもいいと切り返す母親の Witz はあまりにも直接的で、辛辣である。ツイレは、人が母親という存在から最も予期せぬ言葉を絵の中の母親にあえて語らせ、それを受け取る側の衝撃の強さによって、彼女たちの置かれている境遇の厳しさをより鮮明に訴えようとしたと考えられる。辛辣で、鋭く切り込む、時に残酷でさえある Witz の言葉は、絵の中の子どもの愛らしさ、無邪気さ、素朴な明るさ、庶民の *Idylle* とも見える光景とは対照的であり、一見矛盾しているように見える。攻撃性を持った Witz はその中に登場する対象、フロイトの言う Witzobjekt を笑い、従って Witz の攻撃性もその対象に向けられているが、ツイレの Witz は絵の中に描かれた対象を笑わない。Witz の笑いの攻撃性は、対象人物の境遇の原因をつくった社会に向けられているのである。ツイレ自身その矛盾を言葉にしている。「私の Witz に笑う人は、その Witz がわかってないのです。」(Wer über meine Witze lacht, hat se nich verstanden.)¹⁴

6. まとめ

ツイレの作品の特徴は、絵とその下に添えられた Witz の相互作用に

14 Kremming, S. 99.

ある。ツイレの画家や版画家としての力量は誰もが認めるところであり、絵そのものを独立させても高く評価されるものである。しかし、絵の持つ肯定的なユーモアと Witz の攻撃性という、一見、相反するこの2つの要素が相まって、作品はさらに風刺性を増し、社会に対して Milljöh の現実を突きつけているのである。あるいは、絵があまりにも絶望的でそこにユーモアが入り込む隙のない場合は、下に添えられた Witz が「絶望」に風穴を開ける。従って絵の部分と Witz の部分が一体となって、理解されなくてはならない。

ツイレは『マインミリヨー』と題した画集に、121枚の作品をまとめている。『マインミリヨー』は画集のタイトルであるが、境遇や階層、場所などを表すこの言葉はツイレが生涯をかけて描こうとした世界である。ツイレが描く「置き去りにされた人々」の境遇は、少年時代に体験した彼自身の世界である。ドイツ語に Heimat という言葉があるが、これは単に場所的な「故郷」を意味するのではなく、子ども時代の自分を取り巻く世界とそれを構成する人々や体験など、時間的、空間的、心理的な要素を包括するものである。Heimat が過去の世界を意味するという考えもあれば、他方で、Heimat は、自分が行き着くところ、本来自分が帰属するべきところ、未だ見ぬ故郷という理解もされる。その意味でツイレの作品のモチーフは、子どもたち、娼婦、母親、居酒屋や裏庭、子どもで溢れた狭いアパートの部屋などの形をとりつつ、ツイレ自身が情的に帰属する世界であった。ツイレは画家として観察し、描く作業を通して作品の対象に客観性を与えつつ、彼自身の Heimat を丹念に描こうとしていたのではないだろうか。

本研究は平成 21 年度科学研究費（基礎研究 C）課題番号 21520355 の成果の一部として発表されたものである。

参考文献

- Fischer, Lothar: *Heinrich Zille in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*. Reinbeck bei Hamburg: Rowohlt, 1979
- Heilborn, Adolf: *Heinrich Zille*. Berlin-Zehlendorf: Rembrandt
- Kremming, Rolf: *Heinrich Zille – Berliner Köpfe*. Berlin: Jaron Verlag, 2002

佐藤裕子

Zille, Heinrich: *Das große Zille-Album*. Köln: Komet, 2009

Zille, Heinrich: *Mein Milljöh*. Köln: KOMET, Fotostatischer Nachdruck der 1914
erschienenen Erstauflage

Zille, Heinrich: *Berliner Geschichten und Bilder*. Fourier: Wiesbaden, 2003

<http://www.dhm.de/lemo>

Heinrich Zille „Mein Milljöh“ Satire, Humor und Witz

Hiroko Sato

Heinrich Zille zeichnete sein Leben lang das Leben von armen Leuten, dem fünften Stand, wie er sie nannte. Er zeichnete dunkle Gassen, Hinterhöfe, erbärmliche Zimmer mit vielen Kindern, Kneipen, und Prostituierten u.s.w... Seine Motive sind autobiografisch nachvollziehbar. Das war das Milieu und die Welt, der er als Kind selber angehörte, und die Erlebnisse seiner Kindheit halfen ihm seine Bilder zu gestalten. Er konnte die gesellschaftliche Misere, die man sich sonst nicht gern ansieht oder wahrnimmt, humorvoll mit viel Reiz und manchmal sogar mit Anmut darstellen, konnte sein seelisches Erlebnis, sein Mitleid und Verständnis vermitteln, so dass die Zuschauer es miterleben.

In seinem 1914 erschienen Bildband „Mein Milljöh“ sind 121 Bilder und Lithographien gesammelt, die das Leben der „kleinen Leute“ in Berlin darstellen. Eine Eigenschaft von Zilles Bildern sind Gegensätze, die aus der Kombination von Bild und Witz entstehen. Seine humorvollen Bilder von Kindern im Armenviertel wirken auf den ersten Blick idyllisch, andererseits sind die hinzugefügten Witze trocken und schneidend, oder sie sind manchmal sogar provozierend. Provozierend und aggressiv sind ebenso seine Motive wie Selbstmord oder Tod, die er wiederholt in seinen Bildern ausdrückt. Wie die Interpretation einiger Bilder aus dem Bildband zeigt, ist die Aggression seiner Witze auf die Gesellschaft gerichtet, die die Misere verursacht und sie trotzdem weiter ignoriert. In diesem Sinne sind seine Werke eine Anklage gegen die Gesellschaft.

Zilles Bilder stehen im engen Zusammenhang mit dem Witz oder der Prosa, die er zu den Bildern schreibt, und man soll somit seine Werke mit seinen Wörtern zusammen verstehen. So bekommen sie mehr

Aussagekraft und die Realität seines „Milljöhs“ wird dann den Zuschauern vermittelt. Auf der anderen Seite gilt die Ventilfunktion des Witzes auch hier. Die Hoffnungslosigkeit der „Vergessenen“ und ihre bittere Realität werden durch Witz und witzige Darstellung seiner Figuren mit Lachen aufgenommen, und damit wird die trostlose Gegenwart etwas erträglicher oder sogar vergnüglich, indem der Kern seiner Aussage unverändert bleibt.

„Mein Milljöh“ ist die Welt und gleichzeitig das Thema, die Zille sein ganzes Leben lang beobachtete und darzustellen versuchte. Was er zeichnete, waren die Figuren, Gegenstände, oder viele verschiedene Szenen bei armen Leuten. Diese Einzelnen machen die Gesamtheit, nämlich das „Milljöh“, seine Heimat, der der Künstler zugehörte.